おわりに

10人の元喫煙者の方々へのインタビューと、それを基にしての私と夫で繰り広げた珍問答、実は私と夫との日常会話に限りなく近いものです。

私の父は喫煙者でしたが、私は父とタバコの話をしたことがほとんどありませんでした。父とタバコの話をすると、どちらからともなく喧嘩腰になって、険悪な雰囲気と後味の悪さしか残らないからです。父はタバコ病になるまでタバコを吸い続けていたことに対して、「俺の何が悪いんだ。みんなで俺を責めて」くらいに思っていたことでしょう。その父が自らの病を「因果応報」だと気づいたのは、タバコ病になってからでした。

それにひきかえ、夫はタバコをやめたことが自信につながっているのかもしれません。私の無遠慮な質問にも、元喫煙者として正直に答えてくれました。私は夫を通して、喫煙者の気持ちや考え方の一部を知ることができるようになったのです。

そんな我が家の日常のタバコ問答を本にしたいと考えたのは、タバコ病だった父の闘病生活と壮絶な最期を目の当たりにしたことと、敬愛するなだいなだ（以下、敬称略）の死がきっかけでした。

私が敬愛するなだいなだは、精神科医で作家でもあり、アルコール依存症の専門医として『アルコール問答』『アルコール依存症は治らない《治らない》の意味』の著作があります。

また、『教育問答』『権威と権力』『神、この人間的なもの』『民族という名の宗教』など、対話形式で物事を詳らかにしていく著作は、読者がなだいなだの対話相手の立場で読み進めることができるもので、それが一層読者の理解を促すように書かれています。

また、彼の書いたものは時代を経ても古臭さが感じられません。それは、内容が物事の本質を突くものであるからだと私は考えています。私は、彼の著作から、ものの見方、考え方、そして相手にわかってもらうための文章の書き方を学びました。そのなだいなだが2013年6月に亡くなったことは、私にとって父を亡くしたことと同じくらいの喪失感と打撃でした。私は、彼から得たものを、自分の著作にオマージュとして生かしたいと考えました。

『タバコ百害問答』というサブタイトル、そして対話で話を進めていく形を採ったことは、なだいなだへの敬意を込めたものです。

私は、将来、この本が古臭いと言われ、過去の遺物になってほしいと願っています。子供たちが「タバコなんて、昔の物だよね」、「昔はなんでタバコを売っていたんだろうね」、「私たちは、タバコなんかいらないよ」と、言える未来になってほしいのです。

今、その目の前の1本のタバコに手を出さなければ、受動喫煙や、家庭で起きるタバコに関するもめごとや、葉タバコ農園での過酷な労働で苦しむ子供たちを救えるのです。

子供たちをこれ以上タバコで苦しめないために、この本が喫煙者にとってはタバコをやめるきっかけに、非喫煙者にとってはタバコについて考えるきっかけになれば、私にとって望外の喜びであります。

この本を書くにあたり、幸いにも10人の元喫煙者の方が、快くインタビューに応じてくださいました。この場をお借りして、お礼申し上げます。ありがとうございました。皆さんのお話は、これからタバコをやめて、新しい世界の扉を開こうとしている方の背中を押し、き

っと勇気づけることでしょう。

本書で参考にした文献・データは、これまでタバコ問題に地道に取り組んでこられた先達の膨大な研究の賜物です。それらの文献・データをお借りしてこの本が成り立っていることにお礼を申し上げるとともに、先達の皆さんに限りない敬意と謝意を表します。

また、より良い本作りに向けてご指導くださいましたあけび書房の久保則之代表、清水まゆみさんほか、スタッフの皆様に深く感謝申し上げます。

最後に、タバコをやめて、私とともに歩んでくれている慎次、ありがとう。慎次がタバコを吸わないからこそわかる新しい世界の扉を開けたように、多くの人がその扉を開けてくれることを願っています。

2016（平成28）年8月　　荻野　寿美子